



包括的性教育の必要性について どう思いますか？

国際基準の性教育は幅広いもの

日本では性教育というと、男女のからだの違い、妊娠のしくみ、避妊方法、性感染症など、命を育むことや生殖に関すること、からだのしくみを学ぶというイメージがあると思いますが、それだけではありません。ユネスコが中心となり、ユニセフ、UN Women (国連女性機関)、WHO (世界保健機関) など、さまざまな国際機関が協力して作った性教育の世界基準といわれる『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』は、とても幅広い内容になっていて、**8つのキーコンセプトがあります。**

からだや生殖のことだけでなく、人間関係やジェンダーの理解など、さまざまなコンセプトを含んだ性教育をすべての子どもたちに実施していこうという、『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』に基づいた性教育を、包括的性教育と呼んでいます。

最も伝えたいのは自分の権利

ガイダンスでは5歳から性教育を始めることが想定されており、「自分の持つ権利」について大切に扱います。包括的性教育のなかで私が一番必要だと考えるのは、性教育の根本となる人権教育です。SRHR (性と生殖に関する健康と権利) といいいますが、自分のからだは自分のもの

で、自分のからだのこと、性のことは自分で決めるのだ、という権利の意識をまず伝えたいと思っています。誰にでも人権があって、それは尊重されるべきものであると認識していないと、無意識に加害者になってしまっていたり、自分が性被害を受けているのにそれが性被害なのだと気づけなかったり、誰かに「助けて」と言ってもいいことなのだと分からなかったりすることがあるのです。それを防ぐためにも、人権について必ず伝えていきます。

子どもにどう伝えたい？ 正しい性の知識

小さな声かけから性教育は始まる
家庭での性教育は日常会話の積み重ね

8つのキーコンセプト

1. 人間関係
2. 価値観、権利、文化、セクシュアリティ
3. ジェンダーの理解
4. 暴力と安全確保
5. 健康とウェルビーイング(幸福)のためのスキル
6. 人間のからだと発達
7. セクシュアリティと性的行動
8. 性と生殖に関する健康

だと思っています。子どもが生まれて、その子に何かを語りかける時から性教育は始まっているのです。私自身も自分の子どもに接するときは、赤ん坊の頃からオムツに勝手に触らない、オムツを勝手に開けないことを意識しています。今はまだ2歳ですが、「ちょっとオムツ見ますよ」と言ってからオムツを触り、「オムツを開けますね」と断ってから開ける。**プライベートゾーン**に触れるときは「拭きますよ」と声をかける。お風呂でからだを洗うときも、いきなり触ることはしません。日常での小さな同意、小さな声かけの積み重ねで、自分のことを大事にしてくれる人は、からだに触れるときには声をかけてくれる、「いやだ」と言ったらやめてくれる、それが普通だということを学んでほしいと思っています。逆に子どもが

プライベートゾーン

他の人には

- ・ 見せない
- ・ 触らせない
- ・ 写真をとらない
- ・ 写真をあげない